

令和4年度 生活・自立支援キャンプ 「曾爾わくわくキャンプ」

1. ねらい

豊かな自然の中で、様々な体験を通して、大自然の素晴らしさに気づき、参加者間の交流を深めるとともに、集団生活の中で規則正しい生活習慣を身につける。

- あいさつをしよう
- いろんなことにチャレンジしよう
- よく寝て、よく食べよう

2. 実施日

9月10日(土)～9月11日(日) 1泊2日

3. 対象者(参加施設)

真盛学園(三重県)

4. 参加者

7人(小学生3人 中学生4人)

5. プログラム(要約)

本事業では、津市の児童養護施設に入所する児童・生徒を対象に、自然の家周辺の自然環境を活かし、森遊びや野外炊事など、様々な自然体験活動を行うとともに、普段生活している施設とは異なる環境の中での集団活動を通じて、規則正しい生活習慣を身につけるプログラムを実施した。

事業全体を通して、コミュニケーションの充実を図るとともに、達成感や自己肯定感を養うプログラム構成とした。

9月10日(土)

- ・開会式
- ・選択プログラム(森遊び、たき火)
- ・わくわくタイム
(ナイトハイク、バドミントン、ドッジボール)
- ・野外炊事(ピザ作り)

9月11日(日)

- ・野外炊事(カートンドッグ)
- ・選択プログラム(森遊び、たき火)
- ・閉会式

【1日目】

開会式後、曾爾高原の紹介もかねてお亀池周辺を散策した。初めて曾爾高原に来た子供ばかりだったので、高原の説明をしながら散策をした。

昼食をはさみ、本館野外炊飯場にてたき火をした。ファイアースターターを使って火おこしをする子が多く、火花がなかなか散らずに苦戦する子が多かった。子供たちは苦戦しながらも少しずつコツをつかみ、薪に火をつけることができた。参加者たちは着火に成功したことで、自信を深めた様子だった。

15:00頃からは、ピザ作りを行った。生地をのぼし、ウインナーやコーン、トマトなど、自分たちの好きな具材をのせて、オリジナルのピザを作っていた。



夜は、入浴までの時間を「わくわくタイム」として、プレイホールでのレクリエーションを実施した。参加者たちは電子ピアノを弾いたり、バドミントンやバレーボール、大縄跳びをしたりして、思い思いに活動を楽しんでいた。



入浴後、希望者を募りお亀池周辺に散策に出かけた。昼間と違い、月明かりはあるものの周囲は薄暗く、参加者たちは初め暗いところが怖い様子だったが、徐々に慣れていき、遊歩道を一周した。

当日は「中秋の名月」で、月がとてもきれいに見えた。また、遊歩道を歩いていると林の方から鹿の鳴き声が聞こえてきたり、大きなヒキガエルに出会ったりして、初めて見たり聞いたりしたものに驚いている様子だった。

【2日目】

起床後に身支度、清掃を行い、その後野外炊飯場へ移動して、朝食のホットドッグを作った。参加者たちはそれぞれに食材を切ったり、アルミホイルに包んだりして、みんなで協力しながら調理をした。ときどき向きを変えたり火力に気をつけたりしながらカマドで焦げないように温め、ホットドッグを完成させた。調理から片付けまで、スムーズに行うことができた。



6. まとめ

最近になってコロナ対応の制限が少しずつ緩くなってきてはいるが、まだまだ不自由な部分は多い。「子供たちに多くの体験をさせたい!」という施設の方の思いと、子供たちの「やってみたい!」という思いを大切にしながら活動を進めた。参加者は、時間など約束を守りながら、普段なかなかできないたき火や野外炊事などの体験活動に、元氣いっぱい取り組むことができた。

事業を終え、参加した養護施設の方から「(子供たちの)今まで知らなかった一面を見ることができた」「普段では考えられないような積極性や、こんな一面があったのかと思える行動が見られた」といった感想を聞くことができた。

(企画指導専門職 福島 茂樹)

令和4年度 生活・自立支援キャンプ 「曾爾どきどきキャンプ」

2. ねらい

豊かな自然の中で様々な体験活動を通して、健やかな心と体の育ちを支援し、自立していこうとする力を育むことをめざす。

2. 実施日

10月29日(土)～10月30日(日) 1泊2日

3. 対象者(参加施設)

高鷲学園(大阪府)

4. 参加者

18人(2歳3人、3歳6人、4歳5人、5歳4人)

5. プログラム(要約)

本事業では、羽曳野市の児童養護施設に入所する子どもたち(今年度は幼児対象)に、自然の家・周辺の環境を活かし、幼児用アスレチックや森遊び、焚き火・焼き芋、野外炊事など様々な体験活動を行った。

事業全体を通して、幼児である参加者の「やりたい」気持ちを大切に、満足できるまで「活動・遊び」に熱中できるように、柔軟に対応できるゆとりをもったプログラム設定にした。

10月29日(土)

- ・開会式
- ・幼児用アスレチック
- ・森遊び
- ・たき火、焼き芋
- ・ナイトハイク

10月30日(日)

- ・野外炊事(カレー)
- ・閉会式

【1日目】

はじめて長時間バスに乗り、到着後、開会式をしてすぐに幼児用アスレチックに飛びつく子どもたち。どの子も夢中になって遊具に挑戦していた。先生方、ボランティアなど、大人の助けも借りながら、飽きることなくチャレンジを繰り返し、乗り越えられたときには全身で喜びを表す姿が見られた。また、ススキを集めたり、綿毛を飛ばしたりして遊ぶ子たちもいた。遊び疲れた頃に、おにぎりの昼食をとり野外炊飯場に移動した。

午後の活動は森の散歩から。幼児にとっては少し難易度が高いようなトレイルにも分け入り、敷地内で最も標高が高く見晴らしの良い地点から、山なみやススキの草原を眺め、下山すると焼き芋タイム。焚き火の前で、焼き立ての焼き芋をほおぼる子どもたちは、疲労感の中にもやり切った自信のようなものを感じさせた。

夜の活動は星空散歩とし、近くのお亀池の周回コースを散策。一人一人がヘッドライトを装着し、薄暗い

道を手をつないで歩いていく。途中でライトを消して、満天の星空を眺めた。

生後すぐにコロナ禍に突入し、圧倒的に体験が不足しているとの先生方のお話の通り、体験活動への渴望を感じさせると共に、豊かな自然の中で、体を使って思い切り遊び、喜びを表現する子どもたちの姿が印象に残る一日目となった。



【2日目】

起床後は、森の中で簡単な朝食をとり、野外炊事に取りかかる。2歳からの子ども集団であるものの、先生方は「子どもたちに体験させる」ということを最上位の目標として共有してくださっていることがひしひしと伝わった。皮むきや包丁の使い方、食材を洗うこと、米を研ぐこと、薪を割ること、火をつけ、それを育て、消えないように見守ること、もちろん後片付けまで。すべての体験を「子どもたちのもの」にすべく、先生方がサポートし、子どもたちは目の前の課題に懸命に向き合う様子が見られた。様々な役割や仕事を、それぞれの学齢に合わせて、できることやそれ以上のことを精一杯にやってみる。まさに体験活動を通して、子どもたちそれぞれが学び育つ様子を目の当たりにすることができた。



6. まとめ

前述の通り2歳からの5歳の幼児にとっては、生まれてまもなく、もしくは生まれた時点からコロナ禍にあり、様々な制約の中での生活をしてきたと思われ、本来幼少期にできていたはずの「体験」も少なからず制限を受けざるを得なかったことは容易に想像することができる。

今回、曾爾高原で子どもたちにたくさんの「はじめて」を経験してもらい、それぞれが目の前の課題(遊び)に向き合う中で、小さな達成感や自己有用感を積み重ね、これからの成長につながっていくことを期待している。

よりよい体験活動を提供し、子どもたちの成長を支援したい施設の思いと子どもたちのリズムや思いを大切に、子どもたちが主体・中心となる行事にしたいという先生方の熱意を両輪に実現した事業になったと感じている。

先生方はもちろんスタッフ含め「大人」もたくさん笑い、子どもたちに喜びと元気をもらおうキャンプになったと実感している。

(企画指導専門職 三木 智弘)